



空に連なる地平(2)

——虹——

津守 真

私は、若いときから二十年以上、実証的心理学の方法にしたがって、子どもの行動を客観的に詳細に記録をとり、科学的に処理して体系をつくることを目指してきた。保育の実践研究の方法としてはそれがいかに不毛であるかを自ら体験した。そして子どもとかわりつつ現象として見ることに、意味をさぐる反省的思考など、思いついて保育研究の転回をした。そのときに日々のノートを新しくして、もはや元に戻すことはできない思索のあとを書きとどめた。



混沌

昨日は一日、国際学会のための原稿作りに時間をあけておいた。しかし、一日かかって、一行も進まず、頭痛は増すばかりであった。

かなりの程度にわかりかけていて、しかし霧が晴れない。前に考えたことまでも、混沌の中に溶けこんでしまう。無理に書こうと思えば書ける。しかし、簡単に片を付けてしまうことはいけないような気がして、あえて筆を取らないでいる。

こうして国際学会を前に控えながら困っている自分の奥にある本質は何であるか。「地は形なくむなしく、闇が淵のおもてにあり」（創世記一章）と、聖書の第一ページに記されている。

混沌は宇宙の本質である。

「神の霊が水のおもてをおおっていた。神は光あれといわれた」。

人間にとって、混沌はいつまでも混沌のままではいけない。明らかに照らし出される可能性をもっており、事実そうなる。神が光あれと言われるそのときに明らかになる。

私はそのときまで、混沌のままではいなければならない。

一九七二年七月十九日



空に虹を見たとき

銀座の空に虹を見た

東京の空にも 虹がかかった

私は銀座の三原橋の角に立って 半時間以上

虹がほとんど消えるまで見ていた

地と天とを結ぶ橋

神と人との契約の証

地から天に昇る階段

首をあげて美しく見る 希望

その色の輝きは 神の賜物とよりほか考えられぬ

公害の空にも与えられた自然の恵み

むかしイスラエルの人々は虹を見て神の契約を思い
それが消えるまで見つめていた



それが消えてもなお 人々は地上にあつて

天上のことを忘れなかつたであろう

歌舞伎座のあいだに虹が薄れるのを見ながら

私は地下鉄に入った

歌舞伎座の公演に「虹を掴む男 青春篇 立志篇」という札があつた

地下鉄を出て 夕陽の燦として輝くのを見た

黄金色に 五色に輝く夕陽の輝きはいつもと違った眩しさであつた

この夕陽と虹とは切り離せない

一九七二年八月六日

学会が終わつて、子どもたちと共に、祖父母の田舎の家に入った。海の波の絶えず動いてやまない水の中で遊んだ。駅のわきのあまりきれいでない蕎麦屋で食事をして帰った。すぐに子どもたちは庭にござをしいてままごとを始め、私にも入ってくれという。そのときどきのことを考えて見ると、それぞれの時に感じていたものがあつた。子どもと一緒にいるときには、その時がすべてのように思えて、子どもたちが生



きていた世界に気づかないで通りすぎてしまう。その時は次々に移り行き、思い起こしてみようと、何と豊かな世界がそこに展開されていたのかと思う。その時には意識に上らなかつたことをもいま考えることができる。こうして、その時のことを思い起こすたびにそのことの意味が次第にあらわにされてゆく。保育者は精一杯子どもとともにいて感じとつたことをもとにして、反省的に考える。

一九七二年八月十日

このときから、私が本式に保育実践者の生活に入るまでに十年余の歳月がかかった。そして十数年間の保育の体験を経て、私自身の保育研究転回のあの時がなかつたら、私の保育も保育研究もなかつたと思う。その養護学校校長の時期をも通りすぎ、いままた、障碍をもつ大人の居住型施設の仕事に力を注いだ年月をも終えることとなった。虹の橋を渡り終えて、私は初心の原点に戻って保育研究者としての道を歩み続けたいと願っている。

一九九八年七月二十六日